



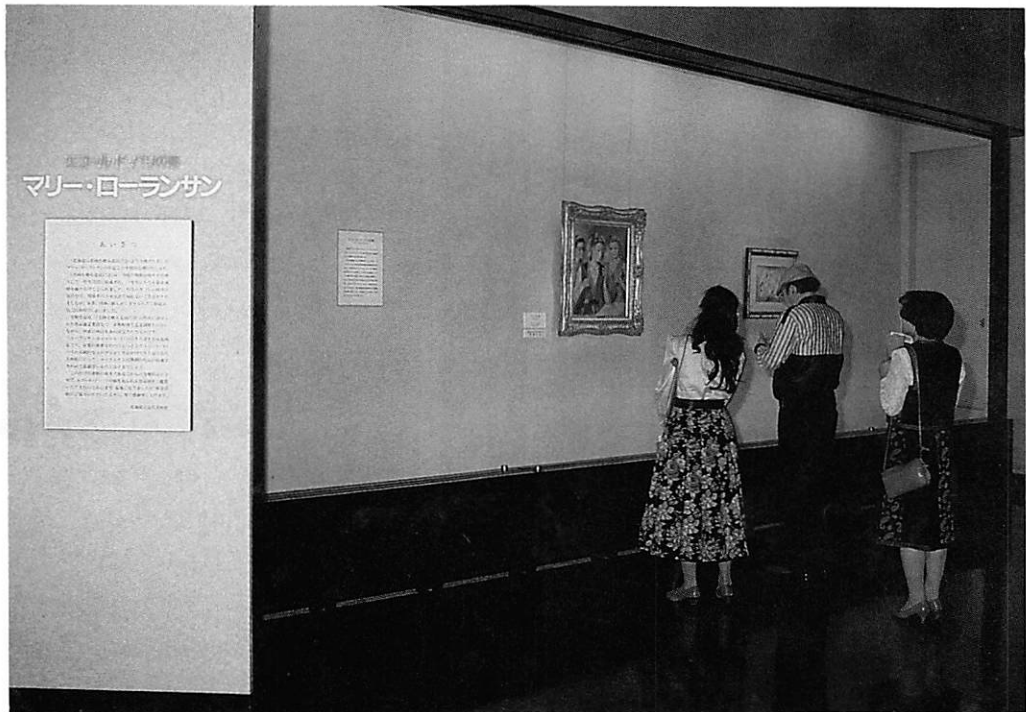
会 報

第13回

昭和63年10月

北海道美術館協力会

札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



「北海道に名画を贈る道民の会」寄贈作品特別公開展会場風景

～～～みんなで参加しよう会員のつどい～～～

今年もまもなく「会員のつどい」の時季が参ります、会員の方々が最も楽しみとし、期待されている催しですので、この行事を担当している事業部では、ボランティア部の協力を得て既に数回会合を開いて計画を練っております現在までに決まったのは、特別講演を井関道立近代美術館長にお願いし内諾を得ました。開催日時は同館長のご都合もあって、12月16日午後5時から道立近代美術館で行います。パーティー等についても関係者がアイディアを出し合って検討中です。会費は3,000円、当日入会される方も大歓迎しますので、(当日受付で会員証を発行します。)友人、知人お誘いのうえ多数のご参加願います。

なお、この日は「北海道に名画を贈る道民の会」の解散式も一緒に行われる予定です。

【プログラム】		
1. 北海道に名画を贈る道民の会総会		16:30～17:00
2. 会員のつどい開会 会長あいさつ		17:00～17:10
3. 特別講演 井関道立近代美術館長		17:10～18:10
4. パーティー・抽選会その他		18:10～19:30
5. 流れ解散		20:00



ごあいさつ

北海道立近代美術館長 井 関 正 昭

本年5月館長に就任以来ほぼ半年過ぎました。友人でもあった前館長、佐藤雅彦氏の後を継ぎ、創立10周年を過ぎて基礎のできた道立近代美術館を今後どのように発展させるか、その重責を日毎痛感する次第です。

かつて鎌倉の近代美術館にいたこともあり、長い海外勤務や、国内でも一貫して美術展の国際交流にたづさわっていた経験をどう生かすかが、当面の私の目標であります。それよりも、その経験の中で、この美術館が国内で有数な美術館の一つであることはよく知っていましたので、果して私のような者がこの重責に耐えられるか不安がないわけではありません。

しかし、美術館というのは、世界中どこでもそうですが、美を通して人々の心の生活を向上させ、正しい歴史を人々に伝え、平和に生きることの大切さを訴える一つの拠点であるとすれば、われわれの活動の責任は無限に重いといわざるをえません。しかも、声を大にして平和を叫ぶというのではなく、その活動は極めて地味であり、また謙虚でなければならないと思います。

この美術館が幸い高い評価を得ているのは皆様も御存

じと思いますが、それは充分誇りにしてよいでしょうし、その原因は、すぐれた展覧会の企画やユニークなコレクション、積極的な普及事業の展開、進歩的なボランティア活動を含む協力会の組織にあると考えます。

しかし、コレクションはまだまだ充実しなければなりませんし、普及活動も時代の流れに即した発展ないし改革を考えなければなりません。また、多くの美術館が抱えていると同じ行政面の課題や、少ない予算の問題もあります。竹槍で戦争に勝つことが出来ないのと同様、先進的な施設の拡充やデータのコンピューター化も必要と考えます。国際化という問題も単に流行的な面を追うのではなく、何が本当の国際化であるかの議論を充分経て実際の活動を進める必要があるでしょう。文化は一朝一夕に成り立つものではありませんし、いくらお金をかけても直ぐに効果の現れるものでもありません。しかし文化がなければ人は生きていられないということを何よりもまず認識することが大切ではないでしょうか。

こういったわれわれの目指す発展のために皆様がたのご協力を一層たまわりたく、御願する次第であります。

井関正昭館長プロフィール

(いせき・まさあき) 1928年(昭和3年)1月25日、横浜市生まれ。1952年東北大学文学部美学美術史科を卒業。神奈川県立鎌倉近代美術館学芸員から62年、イタリアのローマ日本文化会館開設と同時に着任。70年に同館副館長。

5年後に帰国、国際交流基金に籍を移したが、84年には館長として同館に戻り、併せてイタリア公使を務めた。現在、美術評論家連盟会員、東京国立近代美術館運営委員。著書も多数。東京都文京区在住。60歳。



市民のボランティアに 支えられる美術館

——シェスタック・ボストン美術館長に聞く——

去る、9月4日アメリカのボストン美術館アラン・シェスタック館長一行が、北海道新聞社のお招きで来られ、北海道立近代美術館を視察されました。同館長一行は明64年7月15日から8月20日まで、北海道近代美術館で開催予定の「ボストン美術館所蔵19世紀フランス絵画展」の打ち合せと下見をかねて来られたものです。

協力会事業部では、同日同館長のご好意により約1時間にわたり、ボストン美術館におけるボランティア活動の状況や、独自のシステムによる同美術館の運営方法などについて、多くの示唆に富んだお話を聞くことができましたのでご紹介します。

当日は谷理事さんとボランティア部の延与さんが、通訳して下さいました。

〈シェスタック・ボストン美術館々長〉

私は講演を準備してはいませんが、簡単にお話をし、質問に答えましょう。

まず、この美術館に大変感銘したことを申し上げたい。ボストン美術館は、110年の歴史を持ち、建物もそれを示して大変古いのですが、それに比ぶ当館は、大変美しく清潔でよく維持されている。

来年、マサチューセッツ州と北海道の姉妹州としての新しい関係を祝い、北海道に我々の素晴らしいフランス絵画が来る事を喜んでいる。姉妹州関係に参加でき、大変光栄で、これを皮切りに北海道と展覧会の交換が始まることを願っている。

ボランティアについて、主な組織はレイディース・コミティーとして知られ、80名で構成されているが、メンバーとして止まるには、毎週20時間奉仕しなければならない。コミティーのメンバーになるために署名すると、4年間奉仕しなければならない。我々が半分とみならず20時間を奉仕し、美術館で様々な仕事をするようになる。ある婦人達は、美術館で生け花をする。我々は常時新鮮な花を館中に飾るための大きな基金を持っている。メンバーの多くは、生け花が新鮮で美しいか、毎日確める。事実、去年レイディース・コミティーは、生け花展を開いた。また、基金集めのイベントを企画する。これらの基金集めのために、春に3日間、花のお祭を開催し、毎

年4月には、全館が花で一杯になるので、人々は規定以上の入館料をはらう。

コミティーの8人は、館の図書館で毎日働く。このことによって、ライブラリアンは大切な専門の仕事をする時間を持つことができる。デスクのボランティアは、来館者に図書をわたす。毎日50人から60人が来て、図書を借りだす。これらのボランティアは、図書館を助け、必要を満します。

多分、ボランティアの最も重要な役割は、解説者としてでしょう。約30人の婦人が展示室で解説をし、案内をし、学童を連れて、館内の案内をする。

講堂でイベントのあるときは、婦人達はホステスとして来館者を歓迎し、案内し、プログラムを手渡す。

私達の館に、婦人のボランティアだけしかいないという印象を与えたくない。多くの男性もいて、特に退職企業家がいる。我々は、あらゆる種類の作品の修復を行う一大研究室を持っている。ボランティアの1人は、ボラロイド会社の科学者であった。彼は退職後、毎日6時間、有給の職員と共に働いている。

このように、毎日美術館に来て、各部でボランティアをする人は、50人から60人いる。現在、修復、ライブラリー、事業開発、会計、学芸など、39部がある、レイディース・コミティーとは別に、私の概算では、約60人の男女のボランティアがいて、個人ベースで様々な部におい



て、美術館のために、時間を割いている。これらのボランティアは、正式のプログラムの一部ではないが、美術館で独立して奉仕し、各部によって選ばれる。館長によるコントロールはない。これは、いわばボランティアと各部の自由な関係で行われている。

私は、理事もまたボランティアであると考え。なぜなら、美術館のために、多くの時間と企業経営の知識を与えているからである。理事は、毎月2時間会合する。理事会の運営委員会もまた、必要な時間をかけて集まる。会合は、時には極端なほど、時間をかける。理事は、実業界の多忙な人々である。また、ボストンの美術収集家もいる。約30人で、彼等の英知、知識、時間を奉仕している。我々は彼等がそのお金も奉仕してくれるよう望んでいる。彼等の多くは、我々の主要な後援者で、寄贈者である。

わが館は、完全に私立の美術館である。市、州、連邦政府の援助は、受けていない。その結果、美術館への寄贈としての募金援助に依存している。アメリカの多くの美術館とは異なっている。多くのアメリカの美術館は、市または、連邦政府の援助を受けている。ボストン美術館は、いかなる政府、部局の援助も受けていない、数少ない大美術館の一つである。我々は不利な立場にある。多額の募金運動をするときは、業界の、多くのボランティアの援助を得るばかりでなく、その仲間にも、募金を求める。我々を、財政的に健全な状態に保つ援助をするボランティア、それは唯一最重要なボランティアでしょう。

質問をおうけ致します。

(質問) 1. ボランティアの募集方法 2. 資格
3. 訓練について

(答え) 我々は、いまのところ宣伝してボランティアを探す十分なシステムを持っていない。というのは、当館には解説者や、レイディース・コミティーの会員を希望する人が、実際の必要数を超え、それらの仕事につくために待機している人もいるからだ。80人の会員がいて、80人が待っている状態です。我々はやや門戸を狭くしておきたいと思っている。それが、ある意味で望ましい状態なのです。コミティーの会員になるのが難しければ、かえって多くの人が会員になりたいと思うでしょう。

もし解説者プログラムに受け入れられると、解説を行う前に、2年の訓練を受ける。毎週1回2時間のプログラムで館の学芸員が教える。美術史家で、ドーセント担当の専任コーディネーターがいて、その人も訓練中のドーセントを教える。我々はドーセントといわずギャラリー・レクチャーと呼んでいる。訓練は2年間で、100クラス、毎週1クラスということです。26人のキュレーターがいるが、彼等が最も詳しい、収蔵品についてそれぞれ異なるキュレーターが教える。美術館は巨大で、異なった分野の100万以上の美術品を持っている。世界の美術の、百科事典のようである。ドーセントは、全館で訓練される。また、特別分野の訓練も受けるので、2年の訓練の後、全館を紹介する案内と同時に、エジプト、ギリシャ、ローマ、フランス絵画、日本の絵画など、特定ツアーも行うことができる。我々は、優れた日本絵画コレクションを持っている。彼等は、スペシャリストであると共に、ゼネラリストでなければならない。

ほとんどのドーセントは、美術大学で学んでいるが、我々はそれを絶対の条件とはしていない。ほとんどの婦人は、大学卒で、少なくとも何か美術のコースを学んでいる。もし人々が独学で知識を持っていれば、それも受け入れている。その人々は、美術の基本的知識を持っていることを、示さなければならない。

非常に大切なことを一つ、いわなければならない。現時点では、多くの婦人がグループに加わろうと待ってい

る状態にあるが、フルタイムの仕事を始め、彼女達自身の仕事を掘ちはじめているアメリカの婦人の数は、急激に増加している。現在、全アメリカの婦人人口の40%がフルタイムで働いている。このパーセンテージは年々増加している。であるから、これからの10年は、新たにボランティアを補充することは、徐々に難しくなるであろう。

(質問) ボランティアの数は、460人ほどと聞いているが。

(答え) 美術館は巨大で、39部局に700人のフルタイムの職員がいる。多くの部局では、ボランティアが、前に申したように、非公式の形で奉仕するように、取り計らっている。館長の事務室でさえ、誰がボランティアであるかわからない。彼等は、所属する部局の長とはたらし、美術館の中央事務局の管轄の下にはない。ツアーを行う学生、ボランティアも含んでいる。絵画、陶芸のクラスもあり、教えている。土曜日の朝1時間、小さい子供達に絵を教える美術学生もいる。であるから、数を確認するのは難しい。しかしこれらのボランティアは、週20時間、定期的に奉仕している。レディーズ・コミティーとたぶん他に60人ほどいるのではないか。

(質問) 理事会が活発に活動しているが、館長との協力など。

(答え) 毎月、理事会の準備のため、私は非常に忙しい。しかし、理事が集まる時、私は問題を説明し、非常に良い助言を得ることができるので、大変役に立つ。我々の美術館では、よく協働して決定するが、館長は多くの面で促進役、コーディネーターで、専制者ではない。特別の知識を持つ、特に経営アイデアをもつ理事と共に、仕事をしている。私は、美術の教育を受けているため、経営問題に関し、企業家や理事会の助言に、大変に依存している。

(質問) 政府援助をまったく受けていないとのこと、資金源について伺いたい。館長御自身も、資金集めをさ

れるかどうか。

(答え) 幾つかの資金源がある。まず5ドルの入館料です。毎年100万人の入館者がいるので、400から500万ドルの収入を受ける。我々は、過去100年間に、贈物、遺産、寄付の蓄積からなる高額の基金を持っている。この時点で我々は、約1億3000万ドルの額を授かっているのである。我々はこの基金からの収入を持っている。また、活発なミュージアム・ショップがあり、メールオーダー事業まで持っている。ショップから購入することの出来るギフトのためのカタログを、年に4回600万部発送している。昨年は、30万のメール・オーダーがあった。非常に大きな小売業を持っているということで、70名の専任者が、ショップとメール・オーダー事業に働いている。すべての陶器、スカーフ、ネクタイ、などのカタログを発送し、事実日本の素晴らしい品も見付けている。京都のじゅらくは、多くの美しい品を提供し、我々はそれ等をカタログで販売している。これもまた、大きな収入源です。美術館の会員がいます。会員は35ドルから1,500ドルの間で年会費を払う。ボストンには、5万2000人の会員がいる。入会して、無料入館とショップでの割引きを得ます。毎年1,000ドル以上を館に与える人々のために、パーティーを開き、晩餐会に招待するが、時には、年に数回開かなければならない。これは毎年200万ドルの収入となる。毎年、年末の贈物を美術館にするようにアピールする。私は日本でチャリティへの寄付に対し、税金の控除があるかどうか知りませんが、アメリカではこれが、評価の上だった株式、公債、あらゆる種類の資産を寄贈する、誘引となっている。美術館も寄贈された美術品の価値が上がるので、利益を得る。優れた作品の価値は、評価が急速に上がっている。アメリカの寄贈者は、価値の高騰にたいし、完全に税金を免れることができる。もし20年前に1,000ドルで買ったピカソの作品が、現在100万ドルであるとして、彼がこの作品を美術館に寄贈すると、彼は現在の価格で税金の控除を受ける。ですから、これは寄贈に対する刺激になる。この様な資金源があるにもかかわらず、我々は小さな赤字を持っており、その解消のため、常に努力していることをいわねばなりません。

美術に親しむアメリカの子供たち

——ワシントン・ナショナルギャラリー——

札幌大谷短期大学教授 藤田道子



昔、祖母が白たび、白作業着姿で、他人を寄せつけぬ程の気迫で日本画を描いていた、という環境に育ちながら、理由が戦時中であつたにしても、美術館で名画に出会つたのが、上京直後の18歳とは、いさゝか遅かつたと悔やまれる。当時の美術館、博物館は、ドラマならずとも現実に、お見合いの場になったり、学生同志の甘く、淡いデートには格好の場所、という時代であつたが、大事に貯めた小遣を手に、独り、恐る恐る入場して、しかし、心の中だけは自由解放。自分だけの世界に浸り、存分に楽しみ、大いに満されて帰つた日々が懐しい。

大袈裟に言って、音楽会と美術館通いが、学生時代の活力回復と励みの場であつたと思う。

高い天井の下、大きな水墨画の前に、輪になり、コートを床に敷き、男女仲良く座っている小学2年生たちに出会つた。ワシントン・国立美術館で校外学習中の一団である。場所柄、小声で説明をする先生に向けた子供たちの目は輝いていた。「質問はないか?」と言ひ終らぬうちに「川に掛っている橋が兩岸に届いていない、も一つ変だ!山の木が浮いている、風で倒れないかな。」と男の子。先生は良い質問だと褒めてから「墨画は写真で撮つたように、物の形を線で表わさないのが特徴で、この画は霧の中に、かすんで見える山村の景色を、そっくり表わしたのではなく、情景の感じを伝えている。」と丁寧に説明した。盗み聞きのをれら夫婦も、此処で学んだ次第。続いて、木々に止っている鳥を指して「寝ようとしているの?目が覚めたところ?」に「月が出ているから夜だよ。」「男の人が背中丸めて疲れ切っているので夕方だ。」と各々、手を上げて意見を交わす中、小柄の女の子が「生まれつきの体型かも知れない…。」と消え入るようにつつ。すかさず隣の丈夫そうな子が「出掛ける時、きつと

ママに叱られたのよ。」と堂々とした声で皆を笑させた。何と明るい学習風景だろう。同じ日のこと、動く美術品のように、色彩豊かな洋服の背に、動物たちの顔を形どつた厚紙に、名前を書いたゼッケンをぶら下げた幼稚園児たちがいた。引率者のうしろを転びそうに小走りで移動していた5人の女兒が、急に床に、しゃがみ込んだ場所があつた。槍をかゝげて立つインディアン酋長のブロンズの前である。「下着つけてないでしょ?」と少しおどけて「腰みの」の下から覗き込んでいるところに、先生が笑顔で登場!子供たちは両手を出し、肩をすぼめて、何もしてないよ、というポーズをしたと思つた途端、5人が申し合わせたように、腰をかゝめてインディアン・ダンスを踊り始めたのだ。偶然、居合わせた私にウインクをした先生が手拍子の真似をして子供たちに合わせた30秒足らずの出来事であつたが、心なごんだ瞬間であつた。若し私だったら「コラッ!」と叱つたかもしれない。

この様に子供たちの素直で自由な発想が、想像の世界を展開させて、創造するエネルギーを生んだ、小さいながら、その現場にいて、この人としての感性を大切に育てる、よりよい環境づくりを身近で進めていきたいと痛感した。

昨年末の道民こぞつての募金運動が突つて、道立美術館に新たな宝物が加わつた。待望のM・ローランサンの名画の前に立つた時、かつて多くの方々の善意とボランティア精神に支えられて実現した「美術館で聴くピアノ」演奏会を思い出し、カナダのH・ブラウス氏の名演奏に酔ひ、その余韻を楽しみながら帰路についた日がよみがえつた。究極、高い技術と深い精神性が求められる美術と音楽の関わり。相まつての芸術文化の価値感の高揚を計りたいものである。

三番目の娘の名は「資料部門」

——発足とその活動状況——

相馬 久子



ボランティア部に、今年3番目の娘が生まれました。近代美術館開館と共に誕生した売店部門は長女、1年遅れて求美会と名づけられた次女の解説部門、そして三女の名は「資料部門」。

○資料部門の仕事場は美術館の3階の奥まったところ、新聞切り抜き用の大きな机と、スイッチを入れると下から照し出される仕掛けの机がそれです。私たちはここで、毎日の新聞から美術に関わりのある記事を切り抜き一つづつ台紙に貼って、学芸員の回覧用を作ります。6社分の記事ですから、曜日によっては台紙の数で40枚以上になることもあります。真っ黒になった手を洗ってこんどは月毎のファイルにとじられている記事一つ一つをカードに記入します。カードは図書館で使うあのカードで、道内の作家はもとより、ピカソやダビンチまで同じアィウエオ順の引き出しに納まっています。

○もう一つの仕事はスライド整理です。さきごろ道民の会から贈られたマリー・ローランサンのスライドフィルムも展示室講話などに用いるためや、また戸籍にもあたるような、作品番号順館収蔵品スライドとして番号をふり、所定の位置に保存用のかたいゲッペ（枠）に入れて収める、これがスライド整理の仕事です。

○部員は9人で、午前か午後の3時間を毎週1回お当番します。この仕事は一昨年から10周年記念事業との関連で解説部員が交替で受け持ってきました。解説をした者にとっては、新聞にのる画家のエッセーや個展の記事など、美術図録と同じぐらい大切なものです。開館間もない頃は、作家の手がかりを見つけるだけでも苦労しました。ですから小さな記事の積み重ねが、あの美しい図録を作るということもいつの間にか教わりました。それで資料専従のグループが必要と聞いたとき、解説部門から

3名、売店部門から3名が、そして昨年度の美術講座から3名が希望して加わり計9名で4月19日から一つのグループとして活動を始めました。解説部員時代から中心になって育ててくださった横文字に強い青山和子さん、綿密にコツコツ整理上手の鎌田寿々さんと私が解説から移りました。美しい字で記録を書く川辺安子さん、ワープロに挑戦してラベルを作る佐々木啓子さん、画家の名をよく知っている海南久美子さん、この3人は売店部門から。

○はじめてのボランティア活動にこの部門を選んだ浅野花都恵さん、岡部道子さん、宮下美智子さん。お寿司屋の岡部さんは毎週定休日にお当番をしています。

○新聞切りとカード書き、このイメージは御隠居さん風です。実のところ私も以前はそう思ったものでした。しかし実際は違いました。大へん目を使いますし、スライドは手先きの仕事です。カードに記入する前に、内容を読んで決まっているパターンのどれに当てはめるか見つける、これがなかなかやっかいなことです。一つの記事にカードが一枚とは決まりません。公募展の記事は、5枚も7枚ものカードになります。スライドのラベルはワープロも使って作ります。現在作っているカードは8年前の分ですから早くその年のカードを作るところに漕ぎつけたというのが、さし当てるの目標です。その次は、北海道美術の流れを伝えるもっと古い時代の記事も待っています。いっしょに活動する仲間をふやしたいと願って、いま新しく加わる方々のために、私たちが今まで身につけたことを整理して、わかり易くお伝えしようと、資料整理のマニュアルに取り組んでいます。最後に、資料部員の合言葉をおきかせしましょう。

「仕事には厳しく、仲間には親切に。」

事務局だより

新 役 員 の 紹 介 (任期 63. 6~65. 6)

今年役員改選の年でした、6月10日に開催された通常総会で、市川純彦理事から健康上の理由による辞任の申し出で承認され、その後任と一名増に伴う新理事として、今井リツ、伊坂重孝の両氏が選任されました。それ以外の理事、監事さんは全員留任となり、7月26日開催の理事会において、役職と役割分担が次のように決まりました。各理事さんの役割分担では、協力会の維持発展には会員の拡充が急務であるとの認識から、会員拡充企画委員会は副会長が委員長となり、全理事（会長、副会長、専務を除く）が委員となり会員拡充に力を入れることになりました。

役職名	委員会・部会	氏名	職業・役職
会長		武井正直	北洋相互銀行社長
副会長		秋山喜代	秋山愛生館社長
専務理事	会員拡充委員長	北島吉光	幟北島代表取締役社長
		建部直文	F M北海道取締役相談役
	広報部	木路毛五郎	美術評論家
	事業部	阿有坂部	日本国際連合協会北海道本部婦人部委員
	旭川美術館部	相川三志	北海道国際婦人協会会長
	特別事業部	今井重志	相川医院院長
	事業部	伊坂重孝	日本国際連合協会北海道本部婦人部委員
	旭川美術館部	大木元一	札幌放送取締役社長
	旭川美術館部	木内和博	幟一印旭川魚卸売市場取締役社長
	特別事業部	気境	優佳良織工芸館館長
	事業部	小杉八千代	北海道学園監事
	事業部	繁富文	日本国際連合協会北海道本部理事
		杉野目かつ子	幟繁富工務店副社長
	事業部長	鈴木英節	財団法人杉野日記念会副理事長
	ボランティア部長兼事業部 特別事業部	関川節子	北海道新聞顧問
	特別事業部長	谷貴英	北海道美術館協会ボランティア部長
	広報部長	高橋丸義	北海道ユネスコ連絡協議会常任理事
		徳堂垣内香枝	北海道総合美術専門学校理事長
	広報部	長谷井真信	幟徳丸東美堂取締役社長
	旭川美術館部長	馬場昭也	北海道社会福祉協議会理事
		平山徹	北海道日米協会理事
	事業部	和田三	北海道文化財保護協会理事
監事		中山和	札幌リゾート開発公社社長
		村川	明和学園札幌学院副理事長
			弁護士 和田法律事務所所長
			北海道産業クラブ常務理事事務局長
			著述家

○新特別会員に市川氏

当協力会が発足当時から理事・副会長として、会の基礎づくり発展にご活躍いただきました、市川純彦氏は健康上の理由で理事を退任されましたが、総会におきまして特別会員にご推薦することになりました。これまでのご尽力に感謝とご健康を祈念申し上げ今後ともご指導ご協力を賜りたいと思います。

○協力会の美術振興基金へ70万を寄付

このたび株式会社クリーンリバー（古川 勇社長）では、会社設立10周年行事の一環として、同社長が懇意にされている富山県下の「光徳寺」の「棟方志功」コレクション110数点により、9月4日から23日まで札幌の時計台ギャラリーにおいて「棟方志功展」を開催されました。

この展覧会には、棟方志功のファンや美術愛好家多数が鑑賞され、その益金693,230円を本道の美術振興に役立てほしいとご寄付いただきました。

同社では、今年5月にも「北海道に名画を贈る道民の会」へ100万円寄付されており、美術に対するご理解とご協力に関係者一同感激しております。

○'89美術カレンダーの限定頒布

北海道立近代美術館所蔵作品のなかから選んだ、美術カレンダーを毎年作成していますが、今年は北海道を描いた作品で、1・2月は池谷寅一〈天使園春雪〉（1939年）3・4月は木田金次郎〈菜の花畑の落日〉（1955年）

5・6月は田辺三重松〈昭和新山〉（1971年）7・8月は上野春香〈札幌郊外の初秋〉（1968年）9・10月は中村善策〈秋の散歩道〉（1972年）11・12月は国松 登〈水上の人〉（1976年）をそれぞれ使用させていただきましたので、素晴らしいカレンダーとなりました。1部1,000円で2,000部限定頒布します。友人・知人・隣近所の方々にもお勧め下さるようお願いいたします。

○会費の納入についてお願い

社団法人である当協力会の基本的運営財源は、皆さん方の会費によって、賅われていることをご承知のことと申します。今年4月から9月までの会費納入率は52.3%です、昨年同期は49.7%で、昨年より2.6%増えておりますので、会費納入についてのご理解は深まりつつありますが、事務局から会費納入のお知らせが届きましたら、なるべく速やかに郵便振替（振替手数料は無料です）で納入して下さるようお願いいたします。

○海外美術研修旅行について

第9回海外美術研修旅行は、11月1日から11日まで11日間アメリカ（ワシントン・ボストン・ニューヨーク）への美術館・博物館めぐりツアーの募集をしたところ、30名の定員に対し52名の申込があり定員を大きく上回りました。主催の日本交通公社と話し合っており、最大限45名まで実施することになりましたが、その後辞退する方も数名出ましたのでほとんどの希望者が行けそうです。